

スポーツボランティアプログラム
プレ企画

「東京都障害者 スポーツ大会 (陸上競技)」 報告

2018/05/26,27
06/02



第19回東京都障害者スポーツ大会（陸上競技）

5月26日(土)・27日(日)・6月2日(土)、駒沢オリンピック公園総合運動場陸上競技場にて、「第19回東京都障害者スポーツ大会」の陸上競技が開催されました。

本学では、昨年度に引き続き、本学独自の活動である「スポーツボランティアプログラム」のプレ企画と位置付け、ボランティア募集を行いました。3日間を通して、合計25名の首都大生が運営ボランティアとして参加しました。

・陸上競技（知的部門）

5月26日（土）・27日（日）は、知的障害部門の大会が行われました。首都大の学生ボランティアは、両日ともに決勝審判員を担当しました。その役割は、階段状になった審判台に上り、走競技の着順を判定したり、選手の着順記録を整理して、まとめたり、中距離走の周回数を知らせる鐘を鳴らしたりと様々です。

着順判定では、選手がゴールする瞬間を間近で見ることができました。最後の力を振り絞り、一つでも上の順位でゴールしようという、気迫溢れる選手の走りを目の当たりにしたことで、着順を判定する学生の眼差しにも力が入っていたように見えました。

記録を担当した学生は、着順判定が記されているカードを審判員から受け取る人、着順判定カードを読み上げる人、着順を書き出す人等、役割を分担することで、次々に来る情報を整理していました。また、同じ係には他大学の学生も所属しており、活動を通して交流することができたようです。

・陸上競技（身体・精神部門）

6月2日（土）は、身体・精神障害部門の大会が行われました。この日、首都大の学生ボランティアは、トラック競技の出発係や投てき競技の審判員、情報記録係を担当しました。

トラック競技の出発係では、選手にスタート位置を知らせたり、スターティングブロックと呼ばれる器具を設置したりするなど、主に走競技の運営をサポートしました。選手によって車いすを使っていたり、義足を着けていたり、アイマスクをしていたりと、競技スタイルが異なります。そのため、学生たちは、お互いに声をかけ合い、一人ひとりに

必要な道具を準備・設置し、次々にスタートを切る選手を一生懸命に支えていました。

投てき競技の審判員は、ロケットやダーツに似た形のやりを投げ、その飛距離を競う競技である「ジャベリックスロー」の飛距離計測をしました。担当した学生は、この競技の存在を今回初めて知ったそうです。

視覚障がいのある選手には、審判員が手を叩き、音を出すことで投げる方向を示していたり、車いすクラスの選手には、投てき台と呼ばれる専用の台を設置したりします。障がい者スポーツでは、選手の障がいに合わせ、選手の力を存分に発揮できるような環境づくりが行われているということを学生たちは改めて実感していました。

情報記録係は、競技場で行われている全ての結果を集約し、競技場入口に設置している掲示板に速報記録を掲示しました。屋内での活動のため、観客の方々からは見えませんが、選手が競技をしている裏で、休む暇がほとんどないほど、動き回っていました。

大会中は、昼食も全員で同時に食べることができないほど、役割ごとにバラバラで活動していましたが、学生たちは、それぞれの場所で自ら動き、多くの気付きや達成感を得たようでした。

・ボランティアに参加した学生の声

・私は、スポーツに詳しくなく、普段はニュースなどで流れる映像しか見ないのですが、今回初めて競技者だけでなく、それを支える周りのサポートの存在を知りました。

・初めて日本でボランティアをしました。現場で選手が頑張っている姿に感動しました。ボランティアにもっと参加したいです。（留学生）

・表彰台に上がり、選手が喜んでいる姿やその時の笑顔がとても印象的でした。

・観客の方々が、自分の知り合いの選手だけでなく、色々な人を応援している様子がとても温かかったです。

・最初はバタバタしたけれど、気が付いたら周りのみんなが自分からいろいろなことに気付いて、自ら動いていて、とても頼もしかったです。



決勝審判員（着順判定）の様子

階段状の審判台に座り、緊張しながら選手の着順を判定しました。



決勝審判員（記録）の様子

走競技の着順など、審判員から渡される情報を整理し、記録しました。



トラック競技の出発係の様子

スタート位置への選手の誘導やレーンナンバーを知らせる標識の準備・片づけ等を行いました。



投てき審判員

ジャベリックスローという投てき競技の飛距離計測をしている様子です。選手の渾身の1投を確実に計測しました。